

オマーンにおける エスニシティの多様性とその統合

—— 経済開発の視角から ——

福田 安志

- I はじめに
- II エスニシティの形成とその多様性
- III 現政府の下での統合
- IV おわりに

I はじめに

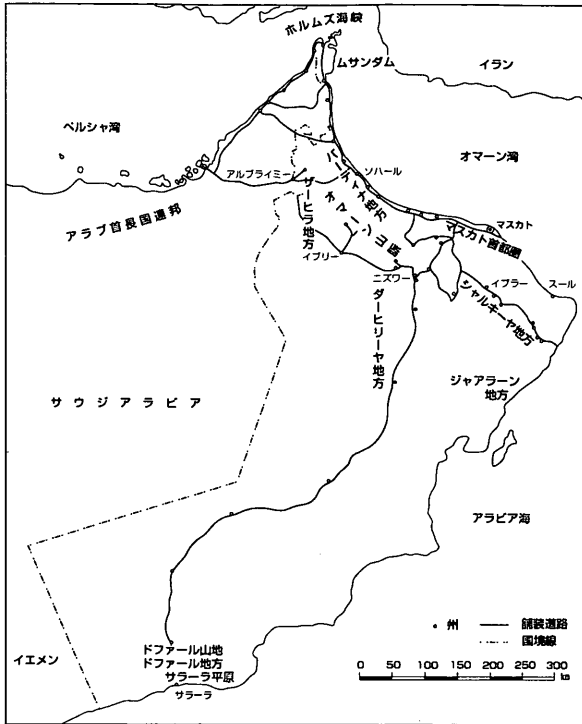
オマーンは、アラブ連盟に加盟しアラビア語を公用語とするアラブ国家であるが、その国民は多様な要素から構成されている。国民の大部分はアラビア語を話すアラブ人であるものの、国民の中には非アラブ系の住民もかなり存在し、その中のいくつかはマイノリティ・グループを形成している。アラブ人に関しても、その社会は多数の部族に分かれており、歴史上はヤマーニー (Yamanī) とニザーリー (Nizārī,あるいはヒナーウィー <Hināwī>) とガーフィリー <Ghāfirī>) の2つの派に分かれて対立したこともあった。現代では部族が政治の前面にでることはなくなったものの、部族社会的な人間関係や部族的意識は政治や社会に無視できない影響を与え続けている。

宗教に関しては、ほぼすべての国民はイス

ラーム教徒であるものの、いくつかの宗派に分かれており、多数派のイバード派を中心に、スニー派、シーア派の3つの宗派が存在している。アラブ人は、部族を単位にして宗派に色分けされている。彼らの中では、イバード派が多数派となっているが一部ではスニー派も信奉されている。マイノリティに関しては、例えばラワーティヤ (Lawātiya) と呼ばれるマイノリティ・グループの構成員はシーア派を信奉しているように、ひとつのマイノリティ・グループは全体としてひとつの宗派に帰属している。このようにオマーン社会は、部族、マイノリティ・グループ、宗派などの多様な要素の重なり合いの中で出来ている。

こうしたエスニシティの多様性は政治にも様々な影響を与え、1970年以降の経済的發展によって経済や社会が大きく変化すると、エスニック・グループに関する様々な政治的問題が生じてきた。本稿では、こうした政治的問題について経済開発とエスニシティの視点から検証する一環として、オマーンでのエスニシティの多様性とその国家的統合について検討する。

また、オマーンには現在約54万人の外国人



ている。その他では、飛び地ムサンダム半島などに少数の人々が住んでいるだけである。1993年に行われたセンサスに基づけば^(註1)、1993年12月のオマーンの総人口は201万7591人で、その内89.2% (179万8933人)は北部のオマーン山脈周辺地域に住んでいる。南部のドファール地方には総人口の8.7% (17万4888人)が住み、ムサンダム半島には1.4% (2万7669人)とごくわずかな人が住んでいるだけである^(註2)。

以上の3つの地域は、それぞれに砂漠や海、山地により他の地域と隔てられ半ば独立した地域となっており、エスニシティをめぐる状況も地域ごとに大幅に異なっている。総人口の約90%の人が住んでいる北部のオマーン山脈周辺地域では、内陸部の住民はほぼアラブ人であるが、海岸部の港町には、ラワーティヤ(ないしはホージャ<Khōja>)、ノスレーチ(Balūchi, ないしはバルーシュ <Balūsh>), ジドジャール(Zidjāl)など非アラブ系のマイノリティ住民も多く住んでいる。この他にもマスカトなどでは、1964年のザンジバル革命の後にザンジバルやその他のアフリカ東部海岸地域からオマーンに引き揚げてきたアフロ・アラブ系の住民なども存在し、海岸部の町はエスニシティの面で多様である。南部のドファール地方には、非アラブ系の山地住民やスンニー派のアラブ人が住み、飛び地ムサンダム半島には、非アラブ系のシフーフ(Shihūh)が住んでいる。

オマーンでのエスニシティの多様性は、歴史的な背景の中で形づくられてきたものである。歴史上は、オマーン地方とは、おおむね現在のオマーンの北部地域とアラブ首長国連邦を合わせた地域のことを指していた。まず、この歴史上のオマーンから見ていこう。

が住んでいるが、本稿ではオマーン国籍を持つオマーン人を中心にして検討を行い、必要がある場合を除いては、外国人については本稿の対象には含めないこととする。

II エスニシティの形成とその多様性

1. アラブ化

オマーンは、その国土面積は30万平方キロメートルあるものの、国土の大部分は人の住むことができない不毛の砂漠地帯と山岳地帯である。人が居住している地域は狭い地域に限られ、住民の大部分は、北部のオマーン山脈周辺地域と南部のドファール地方に居住し

18世紀に書かれたある史書の中では「オマーンはかつてペルシャに支配されていたが、マーリク・ブン・ファハム (Malik b. Fahm) に率いられたイエメンのアズド系アラブ部族がハドラマウト地方を經由してオマーンに入り、ペルシャ軍を破りオマーンを占領し、その後数多くのアラブがオマーンにやってきた」と述べられている^(註3)。アラブのオマーンへの移住は紀元前から行われていたが、紀元2、3世紀頃になると、アズド部族の本格的な移住が始まった。これがアズド部族の移住の第一波であると考えられている。前述の史書が記している話は、このころのアズドの移住にまつわる話が伝説化されたものであろう。イスラーム以前のオマーンは、ペルシャ系勢力の支配下に置かれることが多かった。アラブは、主にこのペルシャ系勢力との抗争を繰り返しながら、何百年という長い年月をかけて少しずつオマーンへ移住したようである。こうして、オマーンにイスラームが伝えられた7世紀の初め頃までには、アラブの勢力はかなり強いものになっていた。そして、イスラームの時代になるとアラブの勢いがいっそう強まり、海岸都市などを拠点として残っていたペルシャ系勢力は7世紀の半ばまでにオマーンから一掃された。その後もアラブ人の移住は続き、住民の中に残っていた非アラブ的要素もしだいに弱まりオマーンのアラブ化が進んでいった。こうしたアラブ化を経て、北部のオマーン山脈周辺地域とりわけ内陸部地域は、ほぼアラブ人だけが住む地域になった。この内陸部地域は、近代になってマスカトに首都が移ったときまでオマーンの政治的中心地であった。

アズド系の部族は南アラブの系譜に属する

が、オマーンには北アラブ系の部族も移住した。オマーンでは、アズドを中心とした南アラブ系の部族はヤマニー(ないしはカフターニー<Qaḥṭānī>)と呼ばれ、北アラブ系の部族はニザーリー(ないしはアドナーニー<Adnānī>)と呼ばれた。紀元2、3世紀頃に行われたアズドの移住の第一波以来、アラブの移住はアズド系部族を中心に行われ、イスラームが伝えられた7世紀初めまでには、オマーンを中心部ではアズドが支配的立場を確立していた。ニザーリー系の部族もオマーンへ移住し、後にはニザーリー系の有力な部族もやってきた。アラブ部族の間にヤマニーとニザーリーの系譜が存在したことは、アラブ部族間の対立を2つの部族グループ間の対立に収斂させた。とりわけアラブの移住によって作り出された初期の不安定な社会情勢のもとでは、ヤマニーとニザーリーは単なる出自に基づく区別にとどまらず政治的な意味も持つことになった。こうして、アズド系の部族を中心とした主流派ヤマニー派とニザーリー派はオマーンの支配権をめぐる対立し、お互いに激しく争ったこともあった。しかし、全体的にはヤマニー系の諸部族が優勢であり、彼らがオマーン政治の主導権を握ることが多かった。地域的には、内陸の中心部ではヤマニー系の部族が優勢で、ザーヒラなど外周的地域にニザーリー系の部族が比較的多く住むようになった。

このヤマニー派とニザーリー派の対立は、初期イスラームの時代には激しかったがその後しだいに弱まり、ヤマニーとニザーリーの名は出自に基づく部族間の区別としては残ったものの、政治的な結集体としてはほとんど意味を持たなくなっていった。しかし、18世紀の初めにヤアーリバ朝の内戦が始まると、

オマーンのアラブ部族は再びヒナーウィー派とガーフィリー派の2つのグループに分かれて争うようになった。ヒナーウィー派の多くはヤマニー系の部族からなり、ガーフィリー派の多くはニザリーの流れをくんでいたものの、かつてのヤマニー派とニザリー派の対立がそのまま復活したものではなく、その構成は、当時の部族間における政治的・経済的な利害の対立を反映したものに再編されていた⁽⁴⁾。このヒナーウィー派とガーフィリー派の対立は構造的な背景を持ったものであり、この2つの結集軸は、時代によって消長はあったものの、トライバル・ポリティクスを象徴しつつ19世紀から20世紀にかけて存在し続け、20世紀のオマーン政治にまで大きな影響を与えた。ちなみに、現在のブー・サイド朝は、王族はアズドの流れをくむヒナーウィー派部族の出身であり、18世紀の建国に際してはヒナーウィー派の部族を中心にして作られている。

ヒナーウィー派とガーフィリー派の形成は、政治的な単位集団としては比較的小さな集団であった各部族⁽⁵⁾をより大きな政治的連合体に結集し、部族勢力にそれまでよりも強い政治力を与えることになった。しかし、ヒナーウィー派とガーフィリー派の存在意義はトライバル・ポリティクスが行われていた時代には保たれていたものの、1970年以降の経済的発展の中で部族社会が変容し部族の持っていた政治力が失われていく中で、両派とも政治的結集体としての実効性を失い完全に消滅した。現在では、アラブ部族系住民の意識の中に残るのみである。

2. 宗派的多様性の形成

預言者ムハンマドの時代に、オマーンのアラブ部族はイスラームに帰依した。そして西暦700年頃にオマーンにイバード派が伝えられると、アラブ部族の間にイバード派が広まった。以後、オマーンではイバード派が支配的宗派となり、現在に至るまで政治はイバード派住民を中心として行われてきた。

イバード派が広まったことによって、部族と宗派との関係はどのようになっていったであろうか。近代以前に関しては資料が少ないため、近代における部族と宗派との関係を見てみよう。アラブ部族に関しては、部族を単位にしてイバード派とスンニー派に色分けされており、大部分はイバード派に属している。しかし、数は少ないもののスンニー派の部族もいくつか存在している。

地域的には、内陸の中心部ではほとんどの部族はイバード派に属しているものの、中心部から離れた外周的地域ではスンニー派の部族が比較的多く見られる。第1表に示したように、とりわけザーヒラ地方とジャアラーン地方にはスンニー派の有力部族が存在している。ヒナーウィー派とガーフィリー派との関係で見ると、どちらも大多数はイバード派であるが、ガーフィリー派の中にはスンニー派の有力部族が多い⁽⁶⁾。

スンニー派部族の存在は政治的に様々な問題をもたらした。例えば、ガーフィリー派は、旧トルーシャル地方のスンニー派部族とも提携してオマーン政治における発言力を強めていたが、ガーフィリー派部族の活動はスンニー派部族にも政治に関与する機会を多く与

第1表 オマーンのスンニー派部族（1908年頃）

部族名	部族員数(人)	主な居住地	備考
(ガーフィリー系部族)			
'Abriyīn	(6,500)	ザーヒラ地方など	少数がスンニー派
Banī Bū 'Alī	7,000	ジャアラーン地方, シャルキーヤ地方	ワッハーブ派の影響を受けている
Āl 'Āzīz	(150)	ザーヒラ地方	一部分がスンニー派
Darū'	(3,000)	ザーヒラ地方など	一部分がスンニー派
Ghafala	500	バーティナ地方	
Ḥikmān	800	南西部海岸地方	
Hishm	(8,000)	ジャアラーン地方	一部分がスンニー派
Jannaba	12,000	スールなど	
Banī Ka'ab	1,350	バーティナ地方, ダーヒリーヤ地方	
Banī Kalaib	1,400	西ハジャール地方	
Maṭārīsh	700	バーティナ地方	
Miyāyīḥa	(7,000)	西ハジャール地方など	Darizの200戸のみがスンニー派
Na'im	5,400	ザーヒラ地方など	
Banī Qītab	2,500	ザーヒラ地方	
Banī Rāsib	1,50	ジャアラーン地方	ワッハーブ派の影響を受けている
Sā'ida	250	ザーヒラ地方	
Banī Sinān	1,500	東ハジャール地方	
Banī 'Umr	(11,000)	バーティナ地方, 西ハジャール地方	少数がスンニー派
Yā'āqīb	3,500	ザーヒラ地方	
Banī Zarrāf	200	マスカトなど	
(ヒナーウィー系部族)			
Bāwariḥ	120	マスカト	
Bidūwāt	1,000	西ハジャール地方, バーティナ地方	
Yāl Braik	(1,500)	バーティナ地方	一部分がスンニー派
Fazāra'	400	バーティナ地方	
Banī Ḥammād	900	バーティナ地方	
Ḥawāsina	(17,500)	西ハジャール地方, バーティナ地方	一部分がスンニー派
Banī Khālid	5,500	バーティナ地方	
Marāzīq	300	バーティナ地方	
Qatait	少数	バーティナ地方	
Radaināt	250	バーティナ地方	
Riyāyisa	1,000	バーティナ地方, 西ハジャール地方	
Banī Sa 'ad	(1,500)	バーティナ地方	一部分がスンニー派
Āl Bū Sa'īd	(6,000)	ダーヒリーヤ地方など各地	バーティナ地方のごく少数がスンニー派
Shiyādī	300	バーティナ地方	
Suwālīḥ	600	シャルキーヤ地方	
Washāḥāt	(850)	西ハジャール地方	一部分がスンニー派
Za'āb	1,200	バーティナ地方	

(注) 現在のオマーン国の北部地域のみを対象とした。トルーシャル地方は含まない。

表に示したのはアラブ部族のみ。() はイバード派を含む数。

(出所) Lorimer, J.G., *Gazetteer of the Persian Gulf, 'Omān and Central Arabia*, Geographical, Calcutta, 1908.

えた。また、ワッハーブ派を奉じたサウード朝がオマーンに進出したときには、ザーヒラ地方とジャアラーン地方のスンニー派部族はワッハーブ派と協力することが多かった。中

でもジャアラーン地方の有力部族ブー・アリー族などはワッハーブ派に改宗し、後にブー・サイド朝の統治から独立する動きを見せるなど、スンニー派部族の存在はオマーンの国

第2表 国民の宗派別人口割合 (現代)

	全 国	北部のアラブ部族系住民	ドファール地方
イバード派	63~72%	85%前後	5~10%
スンニー派	25~30%	15%前後	90~95%
シーア派	3~7%	0%	わずか(1%以下)

(出所) 筆者推定。

家的統合を脅かす存在でもあった。

住民の中でイバード派、スンニー派、シーア派の割合は、それぞれどれくらいであろうか。1908年頃の北部地域(トルーシャル地方を除く)には50万人近くの住民が住んでいたが、第1表などに基づいて、1908年頃の割合を計算してみよう。北部地域のアラブ部族系住民の中では、スンニー派は約15%存在するがシーア派はいない。北部地域とムサングム半島の住民全体を対象として、つまりバルーチやラワーティヤそしてムサングムのシーフなど非アラブのマイノリティまで含め計算すると、スンニー派は約23%となり、シーア派は約3.5%存在している。

現代のオマーン全体の宗派別人口構成は、どのようになっているであろうか。前記の数値にドファール地方の住民(ほとんどはスンニー派である)を加え、また1908年以降もバルーチ(スンニー派)やラワーティヤ(シーア派)などの移住が行われたことなどを加味して、現代の宗派別人口割合を計算してみると、イバード派は63~72%、スンニー派は25~30%、シーア派は3~7%くらい存在するのではないかと推定される^(註7)。また、北部のアラブ部族系住民の間でのイバード派とスンニー派の割合は、基本的には1908年頃の割合と同じであると考えられるので、現代のアラブ部族系住民は、85%前後がイバード派に、そして残りの15%前後はスンニー派に属しているもの

第3表 宗派の出自・エスニックグループ別構成概略(現代)

宗 派	アラブ人	非アラブ人
イバード派	北部のアラブ部族系住民 ザンジバルなどアフリカからの引揚げ者	
スンニー派	北部のアラブ部族系住民 ドファールのアラブ部族系住民 ザンジバルなどアフリカからの引揚げ者	ドファール山地住民 バルーチ シーフ ジドジャール
シーア派	バハレーン系住民	ペルシャ系住民 ラワーティヤ

(注) バハレーン系住民はここではとりあえずアラブ人に分類しておく。

(出所) 筆者推定。

と推定される。第2表に、現代の国民の宗派別人口割合を示す。

3つの宗派について、それぞれに出自ないしはエスニックグループ別に構成を見てみると、第3表に示したようになる。イバード派を構成しているのは、北部のアラブ部族系住民だけである。第2表に示されているように、ドファール地方にイバード派住民が若干存在するのは、主には、行政機構や軍隊などで働きその都合で一時的に居住している者たちとその家族である。スンニー派は、北部のアラブ部族系住民、ドファール地方の海岸部にもとから住んでいたアラブ部族系住民^(註8)、ドファール地方の山地住民、ムサングム半島のシーフ、そして外来のマイノリティ・グループであるバルーチとジドジャールなどから構成されている。シーア派は、ペルシャ系の住民、ラワーティヤ、そしてバハレーン系の住民などから成っている。

3. 非アラブのマイノリティ

宗派のところで見たように、現代のオマーンの国民のうち、シーア派のほとんどとスンニー派の約半分は非アラブ系の国民である。割合にしてオマーン人総人口の10数パーセントか、あるいはそれ以上が非アラブ系の国民となっている。こうした非アラブ系国民の由来はどのようなものであろうか。

すでに述べたようにオマーンではアラブ化が進み、いつしか北部のオマーン山脈周辺地域はアラブ人の居住地域となっていた。近代以前にも、港町マスカトにはインド人などが住んでいたがその絶対数は少なく、北部地域ではアラブ人の支配権が確立されていた。しかし、ムサングム半島にかけての地域では、不毛で峻しい山岳地帯が続いていたためアラブの勢力があまり及ばず、数は少なかったがシーフと呼ばれる非アラブの人々が住み続けていた。1908年頃で、その数はムサングム半島を中心にして1万9000人ほどである。現在でもムサングム半島では、軍人などの基地関係者を除けば、住民のほとんどはシーフである。彼らはかつては独特の言語を話し、その出自については、オマーンがアラブ化される以前にオマーンに住んでいた住民の末裔であるとも言われているが、詳しいことは不明である。現在では、シーフの多くはアラビア語を話す。

18世紀に入るとオマーンの北部地域、とりわけ海岸部で、エスニシティをめぐる状況が変わり始めた。オマーンの北部地域は、17世紀半ば以降に展開された通商活動にともない経済的に発展していたが、そうした中で政治

をめぐる状況も大きく変わり始めた。経済的發展や政治の変化は、非アラブ系の人々をオマーンに呼び寄せることになる。こうして18世紀に入ると、数多くの非アラブ系の人々が、インド亜大陸やペルシャ湾周辺地域から新たにやってくるようになった。彼らは、マスカトをはじめとする海岸部の港町に定住し、コミュニティを形成するようになった。

移民の最初の波は、18世紀の初め頃から半ばにかけて内政が混乱したため、非アラブ人が兵士として用いられるようになったことによって始まった。まず黒人奴隷が兵士として用いられ、次いでマクラーン地方からバルーチが、続いてシンド地方からジドジャールが連れてこられ、傭兵として雇われるようになった。

経済的發展も数多くの外来の非アラブ人を、海岸部の都市に呼び寄せた。それまでもマスカトではインドのヒンズー教徒などが少数居住して通商活動などを行っていたが、18世紀の後半になると、新たに、インド北西部のシンド地方などからシーア派のラワーティヤが数多くやってきた。彼らは主にマトラフなどの港町に集団で住み、通商活動や商業などに従事するようになった。当初は兵士として雇われていたバルーチやジドジャールについては、その後の時代も兵士として働く者が多かったものの、しだいに商業や海運業などに従事する者も増えていった。こうした状況は、いっそう多くの非アラブ人を呼び集めるようになり、バルーチ、ラワーティヤ、ジドジャール、あるいはペルシャ人やバハレーン人などの外来の非アラブ人が海岸部の港町に数多く住むようになった。

彼らの職業は、軍人、船乗、商人、銀細工

師などの職人、さらには床屋や労働者など多様であった。彼らは、都市経済の様々な分野で働いていたが、とくに商業活動が特筆される。彼らの多くは、港町であるマスカトとマトラフに住んでいた。マスカトとマトラフは、17世紀半ば以来、中継貿易や内陸部との交易活動の基地として栄えていた。とりわけマトラフは、19世紀以降は内陸部地方を相手にしたオマーン最大の国内商業の拠点となり、インドなどから輸入された衣料、日用雑貨、穀物、香辛料などの多種・多量な商品が、マトラフの市場を経由して内陸部に運ばれていた。また、内陸部で生産されたデーツなどの産物は、マトラフの商人の手によってインドなどへ輸出された。このマトラフでは、インド出身のラーウィヤが商業分野で成功を収めるようになり、彼らはしだいにオマーンの経済界の中で有力な勢力になっていった。ラーウィヤは、マトラフ以外にも、少数の者がハーブーラ、ソハール、スワイク、バルカ、マスカトなどの他の港町に住み、マトラフの商人と連絡を取りながら商業を営んでいた。一般的に、外来の非アラブ人は海岸部の港町に住み、黒人奴隷を除いて、内陸部の町に住むものはいなかった。

こうして、内陸部にはアラブ人だけが住んでいたものの、海岸部の港町には多様な出自の非アラブ系の住民が数多く住むようになった。中でも、18世紀の末以降オマーンの首都となり外国貿易の拠点でもあったマスカトと、そして国内商業の中心地であり20世紀には経済活動の中心地となったマトラフには、少数のアラブ人しか住まなくなった。そこでは、スルターンや王族などのごく一部の支配層が奴隷兵や傭兵などに依存しながら統治を行い、

商業をはじめとした都市の経済活動の多くは外からやってきた非アラブ系の住民によって担われていた。スルターンのアラブ人側近や少数のアラブ兵はいたものの、あるいは少数のアラブ人商人もいたものの、その総数は少なかった。第4表は1908年頃の、マスカトとマトラフの住民構成を示したものである。この表からは、当時のマスカトとマトラフには多数の非アラブ系の住民が住み、住民の中にはアラブ部族系住民はほとんどいなかったことが見て取れよう。石油ブームの下でマスカトが急成長した1970年代まで、マスカトとマトラフでは、住民の中心は非アラブのマイノリティであった。

マトラフは、1970年代以降の経済的発展にともなう首都マスカトの成長過程で、マスカトとひとつになり、現在はマスカト市の一部となっている。1993年のセンサスに基づけば現在のマスカトの人口は62万2506人で、その内オマーン人が約33万人を占め、残りが1970年代以降新規にやってきた外国人となっている。オマーン人約33万人の中には地方からマスカトへ流入したアラブ部族系住民も多いが、その3分の1くらいはもともと住んでいた住民である。1970年代以前の人口構成を考慮すれば、現在のマスカトでも非アラブ系の住民は相当な割合に上っているものと推測される。

オマーンのエスニシティの状況をさらに複雑にしたのは、19世紀に行われたオマーンのドファール地方併合である。それによって、ハドラマウト系のアラブ部族民と非アラブ系山地民が、オマーン人の中に加わった。ドファール地方は地理的には、海岸部のサララ平原、ドファール山地、ナジュド高地の3つの地域から成っているが、エスニシティの面

では大きく2つに分かれている。サララ平原とナジュド高地にはハド라마ウト系のカシール部族に属するアラブ人が多く住み、ドファール山地には南アラビア語系のいくつかの方言を話す非アラブ系山地民が住んでいる。それぞれの住民は、宗教的にはスンニー派に属している。ドファール地方は、人や文化の面でイエメンのハド라마ウト地方とのつながりが深い地域である。カシール部族はハド라마ウトをもととの出身地とし、非アラブ山地民も元をただせば同じようにハド라마ウトから移ってきた人々であり、それぞれ同系統の住民がハド라마ウト地方に存在している。このため併合されてオマーンの一部となったものの、ドファール地方の住民の間には、アラブ人であれ山地民であれ、マスカタ政府の統治に対する強い反感が存在していた。こうした反感は反政府活動の温床となり、1965年にマスカタの統治に反対するゲリラ活動が始まるとたちまち勢力を拡大し、山岳地帯は一時期彼らの支配下に置かれた。ドファール反乱と呼ばれたこのゲリラ活動は、1975年に最終的に鎮圧されるまで10年間続いた。

現在のオマーンには、アフリカから引き揚げたアラブ人も住んでいる。現在のタンザニアからソマリアにかけての東アフリカの海岸部地方には、近代にかけての時期にオマーンの支配下に置かれていたこともあり、多くのアラブ人が住んでいた。オマーン系アラブ人の多くは、その支配の拠点となったザンジバル島(現タンザニア)に住み1948年の調査では4万4560名のアラブ人がいた。このザンジバル島では1964年に黒人による革命が起こり、その結果それまで支配的立場にあったアラブ人のほとんどがザンジバル島を去り、その多

第4表 マスカタとマトラフの住民構成(1908年頃)
(A) マスカタ

<p>マスカタの人口構成(人口は約1万人) (内訳) アラブ人はわずかししか住んでいない バルーチが最も数が多い、次いで黒人奴隷とその子孫、ベルシャ人 ヒンズー教徒(成人男子200人、女性50人、子供若干名) ジドジャール、バハレーン人 ラワーティヤは10人、ユダヤ人6人 他に少数のハド라마ウト出身者、ソコトラ島の漁民、アビシニア人、ヌビア人</p>
--

(B) マトラフ

<p>マトラフの人口構成(人口は約1万4000人) (市壁内の人口は9000人、市壁外の人口は5000人) (内訳)(市壁内のみ、地区ごと) ラワーティヤ地区(300戸のラワーティヤ) タキヤー地区(300戸で、ラワーティヤの奴隷、バルーチ、バヤーシラ) シャーガ地区(50戸で、ヒンズー教徒、バルーチ、バヤーシラ) サルマッラ地区(25戸で、バルーチ、バヤーシラ) シャマル地区(125戸で、マナーザラ、バルーチ、黒人、ヒンズー) スーク地区(500戸で、バルーチ、ジドジャール、アラブ人、ヒンズー、ラワーティヤ) ワーディ地区(80戸で、ラワーティヤ、バルーチ、黒人) ナージーマウジャ地区(30戸で、ラワーティヤの奴隷、バルーチ、ジドジャール、ヒンズー) イルヤーナ地区(300戸で、バルーチ、アラブ人、バヤーシラ)</p>

(注) マナーザラはイバード派のアラブ部族、バヤーシラは非アラブ系住民である。

(出所) 第1表に同じ(pp. 1179-1200)。

くがオマーンに引き揚げた。彼らの多くはイバード派に属し、また親戚がアフリカにいるなど現在でもアフリカと人的つながりを維持しているものもある。

4. 現代のエスニシティ

こうして、多様な要素から成るオマーンの社会が出来上がった。第5表と第6表は、オマーンの住民を、オマーンにやってきた時期と地域とに分けて整理したものである。そこからは、アラブ人と非アラブ人の両方とも、いくつものグループから成っていることが見て取れよう。

表の中ではオマーンの住民をエスニシティ、宗教、地域などに基づいて分類し、それぞれひとつのグループとして示したが、その実態はそれぞれに異なっている。コミュニティとして比較的まとまっているグループもあれば、個人個人にばらばらになっていてほとんど実体のないグループもある。ドファールの山地民やシーフなど僻地に住み地域性を持ったマイノリティ・グループは、特徴あるエスニシティを比較的良く保持しているものの、18世紀以後にオマーンに移住したグループの中には、コミュニティとしてのまとまりがまったく見られないものもある。例えば、ペルシャ系の住民はシーア派系の各グループの中では人数的には最も大きいグループであるが、彼らの間にはコミュニティとしての一体性はほとんど存在していない。

1970年代以降の経済発展の中で、社会をめぐる状況が以前とは大幅に変わっていることにも留意する必要がある。現在のマスカトでは、マイノリティ住民の多くは、マトラフなどの旧市街地にあった居住地を出て新興の住宅地に移っており、彼らのコミュニティとしての一体性は以前と比べて弱くなっている。また、1970年代以来進められている地域開発

第5表 もとからの居住者と外来の居住者 (現代)

	アラブ人	非アラブ人
18世紀以前 <small>に</small> オマーン <small>に住んでいた</small> 住民	北部 <small>のアラブ部族</small> 系住民 ドファール <small>のアラブ部族</small> 系住民	シーフ ドファール <small>の</small> 山地民 バルーシュリ
18世紀以後 <small>に移住した</small> 住民	バハレーン人 ザンジバル <small>など</small> アフリカ <small>からの</small> 引揚げ者	バルーチ ラワーティヤ ジドジャール ペルシャ系住民

(注) 古い時代にオマーンにやってきたバルーチの子孫で、内陸部のイブリー近くに居住する。人口数は少なく、ほぼアラブ化している。

(出所) 筆者作成。

第6表 地域別の住民構成 (現代)

	アラブ人	非アラブ人
ムサンダム半島	アラブ人 <small>(軍人などの</small> 基地関係者 <small>)</small>	シーフ
北部地域	北部 <small>のアラブ部族</small> バハレーン人 ザンジバル <small>など</small> アフリカ <small>からの</small> 引揚げ者	バルーチ ラワーティヤ ジドジャール ペルシャ系住民
ドファール地方	ドファール <small>のアラブ部族</small> 系住民 北部 <small>から</small> きたアラブ人 <small>(ただし少数である)</small>	ドファール <small>の</small> 山地民

(出所) 筆者作成。

は、ドファールの山地民やシーフなど、これまで比較的まとまりを持っていたグループにも影響を及ぼしている。ドファール山地やムサンダム半島では、道路・通信網や学校などが整備され人々のネットワークや意識を変えつつあるが、こうしたことは彼らのコミュニティにも影響を与えよう。さらに、経済発展の中でマイノリティ住民の職業も変わりつつある。バルーチ^(註9)やジドジャール^(註10)の中には現在でも軍隊関係で働く者も多く、またラワーティヤには商業関係で働く者が多いものの、近年では他の職業に就くものも多くなり、1970年代以降の経済発展は非アラブ人たちの

職業をも大きく変えている。こうした変化は、将来エスニシティの様相をさらに変えていくであろう。

5. ラワーティヤ

オマーンでは、いくつものマイノリティ・グループが存在するものの、経済との関係ではラワーティヤの存在が最も重要な意味を持っている。ラワーティヤと政治・経済との関係については次のIII節で触れるとして、ここでは、ラワーティヤの出自や現状について述べることにする。

ラワーティヤは、インドのシンド地方のハイデラバードからオマーンにやってきたと言われている。筆者が彼らから聞いたところでは、ラワーティヤは、ウマイヤ朝の時代にアラブの武将ムハンマド・アル・カーシムに率いられたアラブ軍がインドに進攻したとき、アル・カーシムに従ってインドへ行き、そのままインドに残ったアラブ人の末裔であるという。彼らは、見た感じはアラブ人よりもバルーチに似ているような印象を受ける。オマーン以外にも、インド亜大陸やインド洋沿岸など各地にコミュニティが存在し、オマーン以外の地域に居住する者たちは一般的にはホージャと呼ばれている。オマーンでは、ホージャと呼ばれることもあるが、アラビア語でラワーティヤと呼ばれることが多い。

オマーンのラワーティヤは、宗教的には、現在はシーア派の12イマーム派に属しているが、もともとはイスマーイール派系のニザール派であった。1840年代にインドのホージャの間でアーガー・ハーンの地位をめぐり争いが起こった時、オマーンのラワーティヤのほ

とんどはアーガー・ハーンと対立する側につき、1860年代になって争いに破れた結果そのコミュニティから追放された。その時にオマーンのラワーティヤは12イマーム派に改宗した。争いに際しアーガー・ハーンを支持したマトラフのラワーティヤの20家族は、彼らの居住区であったスール・ラワーティヤ(Sūr al-Lawātiya)から追放され、スールに隣接した北西部の一画に住みそこにモスクを建てた。12イマーム派に改宗したスール・ラワーティヤ内の多数派は、ナジャフにカーディを送るように求めた^(註11)。このようないきさつがあるため、現在では、インドのホージャとの関係はほとんどないと言われている。一方で、12イマーム派に改宗したためイラン・シーア派の動向に関心が向くようになり、イラン・イスラーム革命に際してはその影響を受けた。

オマーンでは、何百年前から少数の者が港町に住んでいたようであるが、18世紀の後半になるとその数が急増し、以後オマーンでの有力なエスニック・グループになっていった。主にマスカドに近接した港町マトラフに住み、すでに述べたように多くの者がマトラフのスークなどで商業を営むか、あるいはインドとの商取引に従事しており、経済力を蓄えるものも増えていった。その他には、銀細工品の加工と販売に携わっていた者などもあった。マトラフ以外にも、ハーブーラ、ソハール、スワイク、バルカ、マスナアなどのパーティナ地方の港町に少数の者が住んでいた。

19世紀の半ばに出身地のシンド地方がイギリスの支配下に置かれると、新しく移り住んだラワーティヤの中には、イギリス領事(駐在官兼任)の法的保護を受けるものも増加した。イギリスの保護は彼らの経済的権益を守る役

目を果たし、以後長く彼らの経済活動に寄与することとなった。1908年頃のマトラフには1050人が住んでいたとされ、人数的には多くなかったものの、オマーン政府へ多額の資金を貸し付けるなど、彼らの存在は経済のみならず政治的にも大きな意味を持っていた。

マトラフに住んでいた者たちの多くは、1980年代までは、スール・ラワーティヤと呼ばれた地区に住んでいた。スール・ラワーティヤは、壁で囲まれた200メートル四方くらいの大きさの地区である。住民の安全の確保と、女性のプライバシーの保護がスールに住む理由であると言われる。地区の入り口は、海岸通りに面した正門とその反対側の裏口の2カ所にあり、入り口には門番がおり部外者は中へ入ることができない。正門の脇には彼ら専用のモスクが接続しており、このモスクにはスールの中と外の両側から入れるようになっている。オマーンに住むエジプト人の話では、モスクの中にはカルバラから運んできたと思われる石があり、彼らはそれに向かって礼拝をすると言われている。1980年代以降、郊外の新興住宅地に移るものが増えたが、イスラームの行事の節目にはスールのモスクにきて礼拝を行うものが多かった。

筆者は1983年にスール・ラワーティヤの中に入ったことがあったが、その中は2～3階建ての建物が並び、その間を小道が通っていた。当時はまだ多くの人々がスールの中に住んでいた。道からは容易に建物の中を見ることができ、家族の生活空間の一部すら道から覗くことができた。道が広がった場所で広場のような所があり、共同で使用するものと思われる炊事場が広場に作られていた。このように集団で同じ地区に居住していたラワ

ーティヤは、結束力の強いコミュニティを維持していたと言われている。

III 現政府の下での統合

イバード派のアラブ部族系住民が多数派を構成しているオマーンでは、イバード派住民の主導権の下で政治が行われてきた。彼らが信奉したイバード派の統治論では、何らかの事情でやむを得ない場合を除いて、イバード派住民の統治はイバード派教徒の中から選ばれた宗教指導者イマームが行うべきであるとされる。このため、歴史上はイバード派のイマームの下で統治が行われることが多かった。例えば、17世紀の初めから18世紀の半ばまで続いたヤアーリバ朝は、ヤアーリバ家出身のイマームを統治者とした王朝であった。ヤアーリバ朝に続いた、現王朝であるブー・サイード朝でも、18世紀の末まではサイード家出身者がイマームになり、その下で統治が行われていた。また、イバード派のアラブ部族系住民の多かった内陸部に限ってみれば、内陸部地方は1913年から1955年までマスカト政府から事実上独立しており、そこではイバード派のイマームによる統治が行われていた。

イマームはイバード派の宗教的指導者であり、イマームの統治は理念的にはイバード派の教えに基づいた宗教色の濃いものになるはずであった。しかし、住民が部族ごとにまとまっていたオマーンでは、イマームの統治は、部族の存在を無視しては成り立たなかった。こうして、実際のイマームの統治は部族社会の実勢を踏まえたものになり、政治には部族社会の政治的力関係が色濃く反映されていた。

1950年頃のイマーム政府についての記録からも、イマーム統治の実態が見て取れる。イマームの支配下にあった内陸部の町や村には、ワーリーとカーディーが任命され、イマームはイスラーム法に基づいた公平な行政を行おうとしていた。しかし、イマームの選出に際しては、事実上有力部族の合議によってイマームが選ばれていた。ワーリーの任命に関しても、任地での部族の配置とワーリーの出身部族とを考慮し、任地での部族間のバランスを崩さないように人選が行われ、任地とは縁故関係の少ないワーリーが任命されていた^(註12)。このようにイマームの統治では、実際には部族社会の政治的力関係によって左右される部分も大きかった。

イバード派は他宗派に対し寛大な宗教思想を持ちイマームの統治の下ですらスンニー派の存在が容認されていたが、部族社会の実勢を踏まえたイマームの統治は、一定の勢力を保持していたスンニー派部族系住民との協調関係を可能にした。スンニー派部族系住民もイマームの統治が彼らの権益を侵さない限りは、イバード派イマームの統治に反抗することはなかった。こうしてイバード派部族系住民とスンニー派部族系住民の間では、宗派的対立もあまりなく、比較的安定した関係が続いていた。内陸部地方で1913年から続いていたイマームの統治は、1955年に内陸部地方がマスカトのスルターン政府に統合されたことで終わった。ブー・サイード朝は18世紀の末に世俗的王朝に変わっていたが、世俗的なスルターン政府の統治はイバード派部族系住民とスンニー派部族系住民の協調関係をいっそう促進することとなった。

このように1970年までのスルターン政府は、

イバード派住民を中心にしてスンニー派住民とも協調を保ちつつ統治を行っていた。イバード派住民が政府の中心であったとはいえ、政府はイバード派の宗教色を前面に出すこともなく、むしろその統治は部族社会の実勢を踏まえた現実的なものであった。オマーンでは1970年に宮廷クーデターが起こりカーブスがスルターンとして即位し、その下で新政府が組織されたが、この時の政府の構成も基本的にはそれまでのものの延長線上にあった。しかし、前述のように、18世紀以降の領土的拡大や外国からの移民の増加によりオマーンの住民構成はすでに大きく変化していた。内政の安定に大きな関心を払っていた新政府にとっては、こうしたドファール地方のアラブ系住民や山地民、あるいはバルーチやラワーティヤなどの外来の非アラブ・マイノリティ系住民を新政府の下に統合していくことが内政上の重要な課題となり、北部のアラブ部族系住民を中心とした新政府の人的構成もすぐに変化を余儀なくされた。

新政府の骨組みに、最初に変化を与えることになったのは、ドファール地方で起こっていた反政府活動であった。ドファール地方の住民の間では北部のアラブ人を中心とした現王朝の統治に対する反感が根強く、1965年に当時のスルターン・サイードの統治に反対してゲリラ活動が始まると、住民の広い支持を集めるようになり、1960年代末にはドファール山地が彼らの支配下に置かれるまでになっていた。反政府活動にはアラブ系住民と非アラブ系山地民の両方が参加していたため、当初は反政府活動の目的やイデオロギーにはあいまいな点があった。しかし、しだいに非アラブ系の山地民が運動の主体になり、イデオ

ロギー的にも社会主義の影響が強まってくると、サララ平原のアラブ系住民が運動から離反し始めた。こうした時期に成立した新政府は、アラブ系住民の懐柔に乗り出し、アラブ系住民の政府側への取り込みを図った。一方で、ゲリラ活動を続けていた非アラブ系の山地民に対しては、イギリス軍やイラン軍の助けを借りながら鎮圧を進め、1975年までには一応の鎮圧に成功した。政府によるアラブ系住民の取り込み政策の結果、反政府勢力の指導的立場にあった何名かの人物を含め、ドファール地方のアラブ部族出身者が政府の要職に登用されるようになった。1981年のオマーン政府の閣僚名簿を見てみると、22名の閣僚のうちドファール地方のアラブ部族出身者が3名も含まれている(82年には4名となる)。こうして、1970年に発足した時には北部のアラブ部族系住民を中心にして組み立てられていた新政府は、ドファール戦争を経て、ドファール地方のアラブ部族系住民も加えたものになっていった。また、カーブースは、その父サイドとドファール山地民マアシャニー部族のシャイフの娘との間に生まれた子供であるが、カーブースの統治の下でドファール山地民のマスカト政府への反感も少しずつ和らいでいった。こうして山地民との和解も進み、1983年に王族ではあったがマアシャニー部族出身者が大臣に任命されている(ドファール出身の閣僚は計5名となる)。

ドファール地方の反政府活動が収まった頃から、ラワーティヤなどのシーア派住民の間で政府の経済開発政策への不満が強まっていた。石油開発が遅かったオマーンでは石油収入を用いた国内開発は、カーブースが即位した1970年以降に始められた。オイル・ショ

ックのあった1973年以降は石油収入が大幅に増加し、それにもなって国内開発もいっそう積極的で大規模なものになっていった。こうした国内開発の進展にもなって経済も急激に発展したが、財政主導で進められた経済発展は政府を構成したアラブ系住民に有利に働き、アラブ系住民の中には実業面で成功するものが多くなった。すでに述べたように1970年以前のオマーンの経済は港町の住民によって担われ、その中ではラワーティヤなどのシーア派住民が大きなウェートを占めていた。しかし、1970年代の経済発展にもなって数多くのアラブ系住民が経済界へ進出し成功を収めるようになったのに対し、ラワーティヤなどのシーア派住民の中には経済発展の波に乗れなかった者も多く、シーア派住民の間に不満を生み出していた。しかも、外来の非アラブ人であった彼らは政府の要職からは締め出されており、政治的にも強い不満を持っていた。折りからイランではシーア派を主体とするイラン革命が起こりオマーンのシーア派にも影響を与えるようになっていたが、こうした状況を踏まえて、政府は政治制度の改革などを通しシーア派住民を政策決定過程に関与させようとした。1981年に国家諮問議会(マジュリス・イシュティシャーリー・リル・ダウラ <al-Majlis al-Istishārī lil-Dawla>) が設立されたが、諮問議会では45人の議員中シーア派出身議員が7名も任命されており^(註13)、それまでアラブ人中心に行われていた政策決定過程にシーア派住民も制度的に関与できることになった。続いて1980年代後半以降には、シーア派出身者が大臣などの政府の要職にも登用されるようになった。1994年現在で、30名の閣僚のうちシーア派出身者と確認できる者は

3名となっている。こうしたエスニック・グループの国家機構への統合は、石油経済の下で国家が経済と社会において果たしている役割を考慮するとき、単に政治参加を進めたというだけではなく、それを越えたはるかに大きな意味を持っている。

IV おわりに

スルターン・カーブースの統治の始まった1970年以降、オマーン政府は国民の国家的統合に努めてきた。部族社会的な政治が幅をきかせていた時代は終わりつつあり、安定した近代国家を作るためには、多様な要素からなる国民を国家の下へ統合することが欠かせなかったからである。ドファール問題とシーア派問題が解決されていく中で、ドファール地方住民やシーア派住民などのエスニック・グループの国家機構への統合が進み、1991年に諮問議会を改編しシューラー議会(マジュリス・シューラー〈Majlis al-Shūrā〉)が設立されると数多くの地方有力者が議員として選ばれ、国家的統合がいつそう進むこととなった。また同時に国民統合の一環として、政府は、国民の間での文化的一体性の醸成にも努め、新たな国民アイデンティティの創出を通し「オマーン人」として国民を統合しようとしてきた。このために、オマーンの歴史とその文化の独自性が強調されてきた。オマーン人がインド洋で活躍した輝かしい歴史は、アラブ系住民と非アラブ系住民の双方とも共有できる伝統でもあろう。

だが、こうした政府の努力は国民統合という実を結ぶことができたのであろうか。表面

的な国民統合の進展にもかかわらず、近年スンニー派住民の間で反政府的な動きが起こるなど国民の間では統合に逆行する動きも見られる。スンニー派住民の主な居住地は、ムサンダム半島、ザーヒラ地方、ジャアラーン地方、ドファール地方などの地方・僻地に多い。こうした地域では、経済的発展の影響を受け社会的変容が進みつつあるとはいえ、現在でもエスニックなコミュニティが比較的良く維持されスンニー派住民もそれぞれ独自のアイデンティティを維持している。1980年代の半ば以降、地方開発の遅れに対し地方住民の間に不満が強まるようになると、スンニー派住民の間に政府批判の気運が生じてきた。また、地方の若年層の就職問題が近年深刻になりつつあることも、こうした気運に拍車をかけている。政府は、1980年代の半ば以降地方開発を国内開発の重点項目とし、また1991年には地域代表からなるシューラー議会を設立することによって内政の安定を図ろうとしてきた。しかし、1994年5月から6月にかけて、大量のスンニー派の急進派が逮捕される事件が起きているように、国民統合を踏まえた内政の安定化にはまだ成功していない。

(ふくだ さだし/中東総合研究プロジェクト・チーム)

(注1) 1994年6月に発表された暫定値を用いた。

(注2) 外国人を除いた自国民の分布状況について、暫定値より計算してみると、総人口の分布とほぼ同じ比率である。

(注3) Sirhān b. Sa'īd, *Ta'rikh 'Umān al-muqtabas min Kitāb Kashf al-Ghumma al-jāmi' li-akhbār al-Umma*, Masqaṭ, 1983, pp.19-33. シルハーン・ビン・サイドはal-Kalbiの記述を

引用している。シルハーン・ビン・サイドの中では、Mālik b. Fahmに率いられたアズドはハドラマウト地方を経由して来たと言われているが、長期間にわたったアラブ部族の移住においては、アズド系部族のかなりの部分が北方からオマーンに入ってきたと言われている。また、Mālik b. Fahmが実在した人物かどうかは不明である。

(注4) 福田安志「オマーンにおける部族連合とイマームの統治」(『中央大学アジア史研究』第14号, 1990年)を参照。

(注5) 福田安志「アラビアにおける部族社会と国家統合」(『現代中東研究』No.11, 1992年)を参照。

(注6) ヤマニーとニザーリーに関しては、少なくとも近代以降は、ヤマニーよりもニザーリーの方がスンニー派部族が若干多くなっているものの、近代以前がどうであったかについては史料がなく不明である。

(注7) オマーン全体の宗派別人口構成については、1983年頃に文化人類学者のアイケルマンによって調査が行われ、現代の宗派別の人口割合が推定されている。それによれば、イバード派は国民人口の55~60%を占め、スンニー派は30~35%で、シア派は10%以下であるとされる。Eikelman, Dale F., "Kings and People, Oman's State Consultative Council," *The Middle East Journal*, Vol. 38, No.1, 1984, pp.52-53.

(注8) サラーラ平原の中心的部族であるカシル族はスンニー派である。Anthony, John Duke, *Historical and Cultural Dictionary of the Sultanate of Oman and the Emirates of Eastern Arabia*, Metuchen N.J., 1976, pp. 52-53. および Peterson, J.E., *Oman in the Twentieth Century*, London, 1978, p.196.

(注9) バルーチは、バルチスターン地方から移住し

た人々の総称でアラビア語ではバルーシュと呼ぶ。宗教的には、そのほとんどはスンニー派である。1908年頃のオマーンでは、主にパーティナ地方に約2万人が住んでいた。その職業は多様で、かつては軍隊関係以外にも商業、海運業、サービス業、あるいは農業や漁業など様々な職業に従事していた。現代でも商業をはじめ様々な仕事をしているが、軍隊関係の仕事をしている者も多い。以前からオマーンに住む者たちは、現在ではオマーンの国籍を取得している。1960年代末以来のドファール反乱の鎮圧のために多数のバルーチが軍人として新規に雇用され、あるいは1970年代以来の石油経済の中で出稼ぎ勤者として働くものも多くなっているが、その者たちはオマーンの国籍を持っていない。

(注10) ジドジャーはマクラーン地方の部族で、時としてバルーチの中に含まれることもある。宗教的にはスンニー派である。オマーンには、18世紀半ばのブー・サイド朝初期に、傭兵としてシンド地方から連れてこられた。以後、彼らの職業は多様になりその数も増加し、1908年頃には約1万人がオマーンに住んでいた。現在でも軍隊関係の職場で働く者が多い。

(注11) Allen, Calvin H., "Sayyids, Shets and Sulṭāns," Unpublished Ph.D. thesis, University of Washington, 1978.

(注12) India Office Records, I.O., R 15, 6 245, "A note on the Imam's Administration in the interior of Oman."

(注13) Eikelman, *op.cit.*, p.61.

〔付記〕 本論文は平成6年度「湾岸地域における経済開発とエスニシティ」研究会の成果の一部である。